

生成AIに支配される日

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

2022年末から23年初頭、ChatGPTと称するいわゆる生成AIの存在を知った。筆者が試したのは現在顧問として所属する大学について日本語でどんな学部があるのかと聞いたところ、本来あるはずもない医学部の存在を指摘していた。しかしこれは瞬く間に解消された。一方、英語では以前からとても精度が高い。このコラムでも一度取上げたが、タイタニック号の沈没原因について重要なものを5件挙げろと英語で命じたところ、たちどころに得た回答は、英国の海難審判の報告書を読んでいるかのような立派なものだった。火力発電所建設についても重要なポイントを5点あげて説明しなさいと指示すると、これまた見事なもので、さらに日本語に翻訳しなさいとした回答も優れていた。

ずいぶん以前にAIつまり人工知能を研究している研究者と話をした折に、人工知能に例えば「水」をどうやって認識させるのかについて聞いた記憶がある。まさしくアン・パンクロフト演じるサリバン先生とパティ・デューク演ずるヘレン・ケラーの映画『奇跡の人』の最後に手押しのポンプから流れる水を手に受けてヘレンが「水」を理解した、そのイメージだと当該研究者との会話で受けた。

ところが上記の自然言語型AIについては、あくまで筆者の理解だが、ネット上等の非常に多くの情報をもとに、その前後関係からWaterは流れるもの、酸素と水素が反応して出来るもの、といった頻繁に出てくる関係性からWaterという言葉の用法を導き出すのだと思われる。つまりはWaterの何たるかを定義しない。については言葉を定義しないのであるから真偽のほどについてはまるで無関係ということになる。しかしよほどインチキ臭いものは稀であるから、真っ向から間違った回答は出にくい、ということであろう。

この自然言語処理を巡って国、文科省、大学など教育機関はメリット、デメリットの考察に忙しい。功罪を議論したり、利用に条件を付けたり、なにかとにぎやかである。学生に課題を出してレポートとして提出しなさいとやると、自ら考えもせず生成AI大明神にお願いして答えを出してもらう者も当然いるだろうから、それもそのはずである。使用を禁止すると言ったところで、実質、止めることなどできるはずもない。安全対策の基本の第一はリスク原因を排除することであり、取説や注意喚起などは様々な対策を打ったその後でどうしても残るリスクを低下させるためのものであるはずであるが、パソコンなど配布しなければ問題は起きなかったと言えるほど単純ではない。自宅にパソコンがあれば同じことであり、結果、自ら考えない人間が、ただただ増えるだけのことである。1824年に創設されたRensselaer School（現在のRensselaer Polytechnic Institute, RPI）の創始者であるStephen van Rensselaerは学生の成績評価を単なる質問とそれに対する回答だけで評価してはならない。実験によって現れる現象について合理的な説明ができるかどうかで判断しなければならないと戒めている。

先ごろ、各省庁の官僚希望者が減少しているとか。その原因は官僚の業態がいわゆるブラックで、夜討ち朝駆けを含む膨大な業務で国会対応に追われていることも原因の一つとして挙げられている。その負担軽減策として生成AIを活用して法律などの案文を作成すると聞いて驚いた。

法律は国民多数の行動を規制するものであるから、マジョリティとして流布するデータに基づいて作成することに大きな問題は無いとの判断なのだろうか。だとしたら、見当違いも甚だしい。大多数のデータからはじかれる国民はどうなるのか。それを如何に救済するかは重要な視点であるはずだ。法律が、そのような血の通った行政のあり方抜きに作られてよいわけがなかろう。もちろんAIで出来上がったものを修正すればいいという考え方もあろうが、法律はその理念を構想する段階からマイノリティの存在を意識したものでなければならないと信じる。負担軽減云々からくるこの構想がまかり通るなら、与えるデータによってどうにでもなるAIに日本が乗っ取られる日も近いかもしれない。そういえば『ドラえもん』に翻訳こんにやくやおかしなロボットに支配されている世界があった。著名な寺院建築も、宮大工が丹精を込めたからこそそのものである。大工道具に勝手に寺院を造らせては、決してならない。

